

まえがき

本書は、英語など第二言語のリーディングの習得をささえる認知プロセスについて検討しようとするものです。中でもとりわけ、読みの入口にあたる文字言語のデコーディング（音韻符号化）や、読みの情報処理を支えるワーキングメモリシステムについて重点的に取り上げます。その上で、新たに導入された小学校英語活動・教育における文字学習と、英語の潜在的・非明示的習得を促進する多読・多聴学習をどのように実践すると効果的かについて解説したいと思います。

著者のうち1人（門田）は、2001年に野呂忠司氏との共編著で、『英語リーディングの認知メカニズム』（くろしお出版）を上梓しました。英語リーディングの研究動向をまとめた、この前著の刊行から約20年が経過し、本書は当初、その改訂版の刊行という企画趣旨から、『新・英語リーディングの認知メカニズム』というタイトルを念頭に置いていました。しかし、英語リーディング研究の最新動向を、上記本と同様に1冊にまとめるとなると、今日では1000ページを超える大著となることが予想され、ほとんど現実的ではないと判断しました。

その代わりに、認知メカニズムとしては、入門期の文字認識から熟達したリーディングに至る発達過程や、文字インプットの音韻符号化とそれに対する音読の効果、リーディングを支えるワーキングメモリとそのトレーニング効果などに絞って、重点的に取り上げることにしました。そしてその成果の応用として、小学校英語活動・教育における文字学習の効果的方法を探り、大量のインプット処理を実現する多読・多聴学習の効果を、学習開始時から中、高、大を経て、その一里塚とも言うべき100万語に至るまでたどり、成功に導く鍵について、これまで蓄積された実践について報告しています。以上のようなポイントを絞った扱いにすることで、リーディングにもとづく、英語、日本語など第二言語の習得に、今後どのような展望が開けるか、

そのコアとなる部分を明らかにしようとしています。

著者達のこのような試みがどこまで成功しているかは、最終的には読者の皆様、とりわけ主な対象である、小・中・高・大の英語教員や教員志望者、さらに大学その他の日本語教員や教員志望者の皆様のご判断にお任せしたいと思います。

最後になりますが、くろしお出版・池上達昭さんには、提出された原稿を現実に書籍化しようとした2020年から21年にかけて、世界全体を覆い尽くしたコロナ禍に直面する中で、このお仕事を着実に進めていただいたこと、ここに厚くお礼申し上げます。

2021年9月
著者を代表して
門田修平

目次

まえがき	iii
序章 はじめに：本書がねらっているポイント	1
1. リーディング(黙読)プロセスをシンプルに表現すると？	1
2. 書きことば処理の抽象性：話しことばと対比して	3
3. リーディングにおける読み手依存の実態： 読み手の眼球運動からわかること	6
4. 本書のおおまかな内容構成	11
第1章 英語の文字と発音の関係：読みのボトムアップ処理再考	13
1. 識字のしくみ	13
2. 英語の識字のしくみ	17
3. 読み能力の発達	22
3.1 読みの学習への準備段階	22
3.2 読みの学習	25
4. 読みの音韻符号化の障がいとしてのディスレクシア	28
第2章 音読が英文読解力をのばすしくみ： 音読トレーニングのインプット効果	33
1. 書かれた文を理解するしくみ(読み解くしくみ)とは？	33
2. 書かれたテキストの理解と音声・音韻処理	36
2.1 語彙アクセス前音韻(pre-lexical phonology)	36
2.2 語彙アクセス後音韻(post-lexical phonology)	43
3. リーディング(黙読)における音声リズムの役割： 潜在的プロソディとは？	48

- 3.1 リーディングにおける韻律構造仮説 48
- 3.2 黙読における潜在的プロソディ仮説 51
- 4. リーディング力をのばす音読学習：インプット効果 54
 - 4.1 第1期：音読による文字－音の関連づけを重視 54
 - 4.2 第2期：読みのトップダウン処理を重視 55
 - 4.3 第3期：トップダウン処理の前段の
ボトムアップ処理の自動化を重視 56

第3章 ワーキングメモリを鍛えることは第二言語リーディングに役立つか63

- 1. はじめに：日常語になったワーキングメモリ 63
- 2. ワーキングメモリって何？ どんなしくみがある？ 64
- 3. 第二言語ワーキングメモリ(L2 WM)モデル 70
- 4. 実行系ワーキングメモリの神経機構 72
- 5. バイリンガル話者と実行系ワーキングメモリ 77
- 6. 実行系ワーキングメモリの司令塔機能 80
- 7. リーディングにおける実行系ワーキングメモリ：批判的読み 83
- 8. ワーキングメモリトレーニングと第二言語習得 85
- 9. まとめ 93

第4章 入門期(小学校英語活動・教育)における文字学習.....95

- 1. 読み書き学習の前に 95
 - 1.1 歌 95
 - 1.2 絵本 96
 - 1.3 ことば遊び 97
- 2. 読み(書き)学習 100
 - 2.1 文字の学習 100
 - 2.2 デイコーディングの学習 102

3. 識字の難しさへの理解と支援	105
第5章 英語習得に多読はどのような効果があるのか	107
1. はじめに	107
2. 多読の必要性	108
3. 英語に対する情意面の向上	113
4. 多読学習による英語力向上	116
4.1 読書スピード	116
4.2 語彙力	117
4.3 内容理解	123
4.4 文法力	124
4.5 リスニング力	126
4.6 スピーキング力	127
4.7 ライティング力	129
第6章 多読による英語習得の道筋	131
1. 英語学習開始時の学習者：小学生	131
1.1 字のない絵本を利用して絵からストーリーを読み取る 練習	134
1.2 絵本の読み聞かせ	134
1.3 語彙学習(フラッシュカード作成)	135
1.4 音読練習・発表	136
1.5 リスニング(extensive listening, intensive listening)	137
1.6 Activity(ゲーム形式)	138
1.7 多読及び文法導入	138
2. 英語学習中期の学習者：中学生・高校生	142
2.1 中学生の多読	142
2.2 高校生の多読(高校2年生)	145

3. 大学生の多読	149
4. 100万語多読	151
第7章 多読を成功に導く鍵は	157
1. Start with Simple Stories(SSS)	157
2. Sustained Silent Reading(SSR)	159
3. 読書方法	167
終章 おわりに：リーディングベースのプラクティス	171
1. 第二言語プラクティスにおけるメタ認知的モニタリング	171
2. 第二言語習得の要としてのプラクティス	175
2.1 2種類のプラクティス	175
2.2 インプット駆動型プラクティス(多読・多聴)のしくみ	177
2.3 アウトプット駆動型プラクティス(音読・シャドーイング)の しくみ	181
参考文献	185
索引	200

はじめに：
本書がねらっているポイント

1. リーディング(黙読)プロセスをシンプルに表現すると?

本書がその対象としている、リーディング(黙読)のプロセスをできるだけシンプルにモデル化する(simple view of reading model)と、図1の2つの段階、つまり、符号化(decoding)と理解(comprehension)から成り立っていることがわかります。

$$\text{黙読} = \text{符号化(ディコーディング)} + \text{理解(コンプリヘンション)}$$

図1 黙読の主要プロセス

これはちょうど、ことばを聞いて理解するリスニング(listening comprehension)が、大きく、次の2つの段階に分けられるのと同様です。

- (1) 知覚(perception)
- (2) 理解(comprehension)

すなわち、リスニングにおいては、まず(1)で、耳から聞こえてきた音声を、心の中の言語処理システムにインプットし、どんな発音が含まれているかを頭の中に表示させ(心内表象: mental representation)、その次に(2)で、インプット音声の意味内容を把握するために、語彙・統語(文法)・意味内容・前後文脈、スキーマ(関連する背景情報)など各種言語情報を駆使して総合的に理解する2段階があります(門田, 2015)。

同様に、リーディングも、(1) 眼球停留(eye fixation)により、書かれ

音読が英文読解力をのばすしくみ： 音読トレーニングのインプット効果

1. 書かれた文を理解するしくみ（読み解くしくみ）とは？

既に序章では、黙読（リーディング）プロセスをシンプルに表現すると、図 1 であることをお話ししました。本章では、黙読（リーディング）の最初の段階である符号化（ディコーディング）能力の向上に、音読がどのような効果を発揮するかという、音読の「インプット効果」について検討したいと思います*1。



図 1 黙読の主要プロセス

リーディングは一般に、黙読（silent reading）と呼ばれます。しかし、本当に、ことばの音声とは無関係なサイレント（無声・無音）なプロセスなのでしょうか。

これまでも多くの言語学者や読書教育研究者は、次のような視点を共有してきました。

- (1) 「読み・書き」などの書きことばの処理能力（読み書き能力：Literacy）は、日本でも外国でも、かつては一部の学者貴族など特権階級だけが所有していた能力で、一般的に多くの人に普及したのは、15 世紀以降印刷術が発達してから後のことである。
- (2) 現在でも文字、書記体系（writing system）を持っているのは、世界

* 1 「インプット効果」以外の音読の学習効果については、門田（forthcoming）を参照。

ワーキングメモリを鍛えることは 第二言語リーディングに役立つか

1. はじめに：日常語になったワーキングメモリ

ワーキングメモリほど、現在日常的なことばとして一般にも馴染みが深くなった専門用語はないのではないのでしょうか。ここでワーキングメモリとは、人の認知的活動を実行していく上で必要な情報を、必要な期間だけ、能動的・意識的に保持し、処理するしくみを指しています（門田, 2015: 160）。

たとえば、筆者が、夕食にカレーを作ろうとして、スーパーマーケットに向かうとします。スーパーの入り口で必要なものを心の中で音声復唱（音声リハーサル）します。野菜は、玉葱、人参、馬鈴薯…と音韻ループ内で反復します。でも実はもう1つ野菜を入れたいと思っていました。しかしその名前が出てこない、そのときはそれを視覚イメージして、視空間スケッチパッド内のインナースクライブで再生して視覚キャッシュに入れておきます（実はあまり馴染みのないマッシュルームでした）。次に肉です。牛肉を買おうと思うのですが、すき焼き用やしゃぶしゃぶ用でもない、カレーに適した肉ってどんなものか、やはりイメージしてキャッシュに入れておきます。それ以外に、カレーのルーやスパイスも購入します。どこのメーカーのどのルーが今夜は適しているか、一緒に食べる面々を考えて、音韻ループや視空間スケッチパッドに保存します。そうすると、スーパーの入り口から入って、どの順番で売り場をまわれば効率的か、一旦記憶した順番を入れ替えて、その計画を策定します。これは中央実行系の役割です。野菜売り場が入り口近くであれば、それから順に廻ります。そして音韻ループや視空間スケッチパッドを統括して、購入順を決めていきます。しかし、はたと、欲しいカレールーがこの店にあるかどうか不安になってしまいました。そのときは、まずはルー売り場に向かうことにします。これが計画の練り直しで、

入門期（小学校英語活動・教育）
における文字学習

1. 読み書き学習の前に

第1章に記したとおり、日本語の識字（リテラシー：literacy）習得は比較的容易で、読み書きができるようになるしくみや難しさについてあまり注目されてきませんでした。特に、識字に果たす音韻認識の役割は注目されず、文字の読み方（文字音）を覚えて（正確に）書くことに焦点を置いてきました。しかし、英語の識字には、音節より小さい音素単位での音韻認識力が必要です。この力は幼児期に、絵本・歌・ことば遊びなどにより育みます。外国語として英語を学ぶ環境では、英語の音や文字に触れる機会を豊富に提供しなければなりません。小学校英語活動は、読み書き学習開始前の準備としての英語の音を聞く、真似る、音で遊ぶなど、英語圏の子どもたちと類似した体験をする機会を提供してくれます。従来の中学校からの英語学習より、発達段階に適した活動（絵本を読んでもらう・歌う・踊るなど）を導入しやすいのです（例：泉ほか, 2017）。

1.1 歌

歌は最も手頃な教材です。意味がわからなくてもあまり気にせず歌って楽しめます。聞こえたとおりに一緒に歌います。これは、一種のシャドーイング（shadowing）です。最初や最後、あるいはビートが乗っている部分から歌い始めます。正誤が気になって歌い始めないようなら、指導者が一緒のところどころ真似て見せると、安心でしょう。知っている単語が聞こえてくる歌を選ぶと、達成感を与えることができます。歌詞を細切れにして少しずつ正確に言う練習などは不要です。読めないからと歌詞にフリガナを付けてしまうと、音素音韻認識力は育ちません。子どもたちが聞こえてくる音に注

英語習得に多読は
どのような効果があるのか

1. はじめに

多読の概念は 20 世紀初頭の英語教育者 Harold E. Palmer (1917: 1921) によって Extensive Reading という表現を用いて提唱されましたが、国内では、それ以前に夏目漱石が、「現代読書法」(1906) の中で効果的な英語習得法として次のように述べ、多読を推奨しています。

英語を修むる青年は或る程度まで修めたら辞書を引かないで無茶苦茶に英書を沢山と読むがよい。少し解らない節があっても其処は飛ばして読んで往つてもドシドシと読書して往くと終には解るようになる (中略) 要するに英語を学ぶものは日本人がちやうど国語を学ぶやうな状態に自然的慣習によつてやるがよい。(後略)

(川島, 2000: 23)

英語教育界で実際に多読が世界的に実践・研究され始めたのは、20 世紀後半で、Krashen (1985) のインプット仮説発表以来、英語を学ぶ様々な年代のあらゆる学習者を対象とした多読が徐々に普及し始めました。Krashen は、理解可能なインプット (comprehensible input) を $i+1$ (i plus one)、つまり学習者の英語力より、わずかに難しい英語でのインプットが必要であると述べています。一方、多読においては $i-1$ (i minus one) (Day & Bamford, 1998; Bamford & Day, 2004)、つまり、学習者の英語力 (語彙力や文法力) よりも少し平易なテキストをたくさん読ませる手法であると、次のように述べられています。

多読による英語習得の道筋

1. 英語学習開始時の学習者：小学生

2020年度から小学校高学年で外国語が教科となりました。文部科学省の新小学校学習指導要領によると高学年（5・6年）の教科、外国語の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」です。これに伴い、これまで5・6年で行ってきた外国語活動（音声に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う）を、今後は中学年（3・4年）で行い、高学年では、聞く・話すに、読み・書きを追加し、さらに「話す」にプレゼンテーションも追加し、教科として評価するようになりました。この目標を達成するために要求されるものは、英語の知識及び技能（音声・文字及び符号・語・連語及び慣用表現・文及び文構造）を活用し、言語活動（聞く・話す・読む・書く・発表する）を通して指導し、思考力・判断力・表現力（情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりする）を養うことです（直山, 2018）。

現場の教育経験者であれば、この目標は決して小学校だけで達成できるものではなく、中学・高校・大学を通して効果的な英語教育を行って初めて達成できるものであると、誰しも思うに違いありません。これを遂行するために、現在の中学英語の前倒しでなくとも、同じような方法で導入することだけは避けなければなりません。現在の中学・高校英語で挫折した大学生、大学入試には合格しても英語運用能力が全く育ってなくて、英語を駆使できない大学生が年々増加していることを考えれば、現在の指導方法に準じた方法で小学生に英語を導入すれば、英語嫌いの学習者、挫折者がさらに

多読を成功に導く鍵は

20世紀末から多読学習が世界中で広がってきて、日本でも徐々にあらゆる年齢層対象に多読学習が行われるようになりました。主に大学生対象のクラスから始まり高校生、中学生、小学生と、広がってきており、大変喜ばしいことです。ところが、逆にこれまで熱心な先生たちの献身的な働きで成功していた多読指導が、トップ（経営陣、校長、教頭、主任、科長）が多読あるいは英語教育の知識や関心がなく、せっかくの多読授業が消えていっているところがあります。中には、多読の効果が上がっていないとか、入試に役に立たないという理由で、多読の火が消えていっているところもあるようで、残念でなりません。

多読とは、基本的に楽しみながら行う言語学習法で、目的はあくまでも言語習得です。短期的な入試対策とか TOEFL, TOEIC のスコアアップなどは目的ではなく、多読を効果的に行った結果、生まれてくる副産物なのです。

ここでは、多読を効果的に効率よく行い、うまく英語習得がなされるような方法を紹介します。何かを成功させるのに必要不可欠なものは、やる気です。ここでは学習者のやる気を引き出して、多読を成功させる3つの鍵を紹介しましょう。

1. Start with Simple Stories (SSS)

多読を成功させるのに絶対になくてはならないものは、ほかでもない多読図書です。しかもそれは学習者を引き付けて、読む気にさせるようなものでなくてはなりません。様々な学習者の興味を引くために、多読学習開始時には挿絵や写真がついていて、10分ぐらいで読める薄めの本をいろいろと揃えておいたほうがいいでしょう。のちのレベルアップがスムーズにできます。特に、英語に苦手意識を持っている学習者には、平易な英語で書かれた